

「梅棹忠夫著作集」全22巻解題：第22巻 研究と経営

著者	中牧 弘允
ページ	141-141
発行年	2011-03-10
URL	http://hdl.handle.net/10502/4863

研究と経営



学術研究のための組織とその運営についてまとめた巻である。研究経営論と情報管理論が二本柱で、梅棹忠夫著作集の編集・刊行をくわえた三部立てとなっている。

およそ研究と経営は無縁であるとかんがえられがちだが、あえて企業の経営にも似た学術情報の生産と管理について理論的で具体的な指針を提示している。京都大学人文科学研究所と国立民族学博物館が実際のフィールドであり、そこでの実践が組上にあがっている。「知的生産の技術」が個人の技術であるとすれば、本巻は組織の知的生産技術であるともいえる。

梅棹忠夫は研究経営におけるいわば企業者としてたえざるイノベーションをくわだてていた。確固たる経営理念をもち、それを明示的に伝達し、組織全体としての底上げにつなげようとしていた。「研究の自由はあるが、研究をしない自由はない」と研究者を叱咤し、評価や競争の原理を持ち込んで激励した。刊行物の自己申告制や研究業績による昇進制を徹底化し、給料を原稿枚数で割るという研究業績の評価システムまで開発した。

しかし、冷徹な経営者ではなく、研究を主務とする研究者の内的な情熱を燃え上がらせるためのマネジメントに腐心していたのである。たとえば「国際シンポジウムは実行委員長が国際場面で自己を確立する場」と意義づけていた。またそれは、「たしかに実務能力がなければ、研究などという高級な仕事をこなすことはできない」とか「共同研究は研究者の孤立化とそれにとまなう独善化を、集団的に防止するための装置」といった見識に裏づけられていた。研究者には、学識にくわえ見識がないといけないと釘を刺すこともわすれなかった。

研究を支援する図書館やアーカイブズのありかた、あるいはコンピュータの活用についても独自のな見解が述べられ、先駆的な実践例が紹介されている。

梅棹が率先垂範して学術組織の経営にあたり、失明してなお著作集の編纂に取り組んだ軌跡は研究者に勇氣と希望をあたえてあまりある。(中牧弘允)